

岡山県大学図書館協議会平成 23 年度第一回研修会報告書

1. 開催日時： 平成 23 年 11 月 9 日（水）12:30～15:50
2. 場 所： 美作大学、津山洋学資料館
3. 参 加 者： 県内 15 大学・短大・高専 23 名 公共図書館 2 館 2 名 計 25 名
4. 司 会： 横井 沙織 （川崎医療福祉大学附属図書館）
5. 書 記： 奈良 裕子 （環太平洋大学附属図書館）
神原亜紀子 （就実大学・就実短期大学図書館）
6. 内 容： iPad の館内貸出を行っている先進館において、最新の電子書籍及び新しい媒体を活用した利用者向けサービスを学ぶ。美作地方出身の洋学者たちの資料保存がなされた歴史資料館において郷土の知識を深める。

(1) 開会

津山洋学資料館にて横井沙織氏（研修委員長）より開会の挨拶があった。

(2) 津山洋学資料館 見学

平成 22 年にリニューアルオープンした津山洋学資料館は出雲街道に面した古い趣のある街の一角にある。下山純正館長から洋学資料館の説明を受けた後、ガイダンス映像「素晴らしき津山洋学の足跡」を鑑賞。その後館内を館長に案内いただき、300 有余名の洋学者を輩出した当地の関連展示品を鑑賞。宇田川玄随、箕作阮甫等の足跡を辿った。

津山洋学資料館見学後、美作大学講義室に移動

(3) 講演： 大学図書館とタブレットコンピュータの付き合い方

～デジタルとアナログのバランス感覚～

講師： 長谷川 勝一氏 （美作大学附属図書館長）

—前 半—

○電子書籍

電子書籍についてよく話題になっている。しかし日本では前年度比で見ると拡大傾向にはあるが市場規模はまだまだ小さい。アメリカでの規模は年々増大している。一方で日本における書籍の出版市場は、年々出版冊数が増加しているが売上は反対に縮小を続けている。国内の電子書籍のシェアに関しては携帯電話向けが市場規模全体の 88%であるが、これは主にコミックである。スマートフォン向

けはスマートフォン普及と共に年々増加傾向にある。

iPad、iPhone、Android ではアプリ系（デバイスに依存したアプリケーションとして販売されているものを購入する）、ストア系（書店や取次などの流通、IT 企業などからコンテンツとして購入する）等で提供されている電子書籍を利用できる。このほかに PDF、著作権切れの本を集めた青空文庫等も利用できる。PDF の形での電子書籍はすでにインターネット上で学術資料が多く公開されており、誰でも使えて、電子書籍として提供しやすい。

日本国内でストア系のアプリは多数出ているが、現時点では主導権はどこも持っていない。正に戦国時代の状況にある。しかしアマゾンが近く参入するというニュースが報道された。アマゾンが参入することでおそらくグーグル、アップルも国内市場に参入してくるだろう。

○タブレットコンピュータ

電子書籍を読むためのタブレットコンピュータはいろいろな物が出ている。Amazon Kindle、Google Android、Sony Reader、Apple iPad、SHARP GALAPAGOS それぞれ特徴がある。またそれぞれが自前のストアも持っている。どれだけのユーザーを得られるかしのぎを削っている。

本学（美作大学）で使用しているのはアップル社の iPad である。5 台図書館に所蔵している。アプリは 1 台毎に購入している。個人が使用する場合は 1 つのアプリを購入すれば同一の ID で管理している複数台の iPad にインストールして使えるが、購入時に Apple へ確認したところ、法人利用の場合は 1 台毎にアプリを購入するようという回答があった。ただ、今後は変更があるかもしれない。購入される際は確認いただきたい。情報処理教育センターのパソコンをサーバとして用いて管理、初期化し、定期的に点検もしている。

○館内利用者アンケート

約 110 人にアンケートをとった。その結果、インターネット検索はデスクトップ型パソコン、レポート作成はノート型パソコンと使い分けをしていることがわかった。iPad はインターネット検索とマルチメディア参照に使用されているが、利用は少ない。その理由として「利用方法が分からない」が圧倒的である。学生は新しい物が好きと思っていたが実際は違うようで、iPhone 利用者もまだ少なく、レポートはノートパソコンという固定観念もあるようだ。何度も繰り返し利用方法を説明していく必要を感じた。

—実 習—

参加者事前アンケートにより 5 つのグループに分かれた。「図形を描いて考える」、「新しいもの好きか」などの質問項目。その回答結果により各グループにパソコンの得意な人、図形を描いて考える人などをバランス良く配置。実際に iPad

を使用してみる。

<実習内容>

- ① 基本的な操作の説明。
- ② 図書館 HP を閲覧。iBooks から「美作大学紀要」を開く。タッチパネルを指先で操作しピンチアウト・ピンチイン（拡大・縮小）の練習。
- ③ 青空文庫を試す。本のようにページをめくる。長押しで葉をつけることもできる。
- ④ アプリを複数立ち上げるとメモリ不足になるため掃除が必要。ホームボタンを2回トントンとタップ（クリック）、アプリを長押しし揺れている状態に変更し削除。
- ⑤ ストア系提供の電子書籍の立ち読みを試す。『神様のカルテ（夏川草介著）』を読み上げ機能を使い立ち読み。
- ⑥ 『将棋ボックス』を試す。操作によりコマが動く。
- ⑦ 雑誌「アエライングリッシュ（AERA English）」音声コンテンツを押すと英語で読み上げる機能。
- ⑧ 動き、音で表現するものが増えている。パノラマ写真、絵本、図鑑（『元素図鑑』）を体験。音楽あり、美しい元素が表示。）など。自分のタイミングで触ることを体験。
- ⑨ 「鳥獣戯画」を指で動かしながら実際の巻物を見るように見ることができる。
- ⑩ ウィキペディアの検索結果をナビゲーション的に提示する機能を試す。
- ⑪ 「フリップボード」を試す。キーワード検索機能、ツイッターをニュース画面の様に表示。画像検索をすると保存まで可能。
- ⑫ アイデアの展開。アプリを使うため ID と PW でログイン。一つの箱から線を延ばす。次々アイデアボックスを生み出す。

iPad は音が出たり、動いたり自分のタイミングで楽しむことができる。読み上げ機能は視覚障害の方の読書に、学習困難な児童への成績向上に可能性を広げる。インターネット接続が早く、タッチパネル操作は使いやすい。またグループでコミュニケーションをとりながらアイデアをまとめていくことも可能である。パソコンだと横並びでしか見ることができないが、iPad だと対面で画面を共有できる。こうした用途はカウンターやレファレンスでの利用に向いている。今までは本を探しに来た利用者がいても、図書館員が本の所在をカウンター内の端末で検索し、その結果を利用者に紙で印刷して渡して終わり、だったが、たとえば館員が iPad を使って OPAC で調べ、そのまま iPad を利用者に渡すことで、利用者は検索結果から他の本を見つけたり、iPad で参照しながら所蔵場所まで移動することができる。あるいはレファレンス結果を iPad で表示して提示すると、その続きから

利用者がレファレンスの参照を行う、など用途の可能性は広がる。情報を共有しコミュニケーションをとりながら、大学図書館に求められている学生の学習支援、情報教育にも生かすことができる。

—後 半—

○大学図書館に求められる機能

配布資料（「大学図書館の整備について（審議のまとめ）—変革する大学図書館像—概要」平成 22 年 12 月科学技術・学術審議会学術分科会 研究環境基盤部会 学術情報基盤作業部会）にもあるように学習支援、教育活動への直接関与が今、大学図書館に求められている。これからの大学図書館はラーニング・コモンズ、レファレンス・サービス、学習支援、情報リテラシー教育のサービスを担っていくことになるだろう。

○Dynabook（ダイナブック）

Alan Kay が提唱した「Dynabook」（配布資料「あらゆる年齢の『子供たち』のためのパーソナルコンピュータ」）は大人も子どもも好きなときに好きなところで作業ができる、軽くて低価格、学習活動を支援するがおもちゃでもあり表現のメディアでもありと現在のタブレットコンピュータに近いものである。当時の技術で作成可能なパーソナルコンピュータを「暫定 Dynabook」と呼び、これが現在のデスクトップパソコンやノートパソコンの原型となっている。そういう意味では、タブレットコンピュータは一步「Dynabook」に近づいたものだ。ユビキタスコンピューティングを実現するものと考えられる。「OLPC（One Laptop per Child）」と呼ばれる 100 ドル程度の価格を目指したコンピュータも開発されており、発展途上国の子どもたちであっても一人 1 台のノートパソコンやタブレットコンピュータを使って学習ができるようにすることを目的とした国際的なプロジェクトがある。このようにパーソナルコンピュータ（パソコン）とは本来「学びのための道具」として考えられたものだ。

最後に、学びとはなにか。幼児期の遊びは、子どもが自分の好きなことをして遊ぶ「自由遊び」が最初にあるが、先生によって活動内容が決められてその中で遊ぶ「設定遊び」の比率が徐々に増えてくる。「設定遊び」は小学校での「授業」へと形を変え、中学、高校へと進学する中で、自分の興味関心があることについて学ぶ「学習」より、試験や入試という強制力があつてする「勉強」が中心となる。ところが大学に入学すると「授業」の比率が学年進行で減り、「研究」という活動が入ってくる。そもそも大学での「研究」は、子どもの「自由遊び」に近い性質をもっていて、仲間と議論しながら興味関心のあることについて考える行為である。大学図書館は今、書籍や雑誌といった既存の「アナログな情報」を扱

う組織から、電子化された書籍や雑誌、インターネット、マルチメディアという広範囲な「デジタルの情報」を扱う「電子図書館」へと変わることを求められているが、学習支援やラーニング・コモンズ、あるいは情報リテラシー教育やコンピュータリテラシー教育という「学び」の活動の在り方も重要になってくる。その交差点に道具としてのタブレットコンピュータがある。タブレットコンピュータは従来のパソコンと異なり対面でのコミュニケーションを活性化させやすい。デジタルとしての「情報」にアナログとしての「コミュニケーション」があることで議論が活発化して「学び」が成立する。このバランスが必要なのではないか。また、道具にはそれぞれの向き不向きがあり、道具の特性を見極めて活かすことが大切である。皆で楽しくコミュニケーションをとるための道具としてタブレットコンピュータを図書館で活用していけたらよいのではないかと考える。

—質疑応答—

Q. iPad の提供方法について。利用率は。

A. 現在はノートパソコンをカウンターで貸出をしているが、同じようにバッグに入れて貸出をしている。利用率は4%程度。使用方法がわからないためと考える。カウンターの館員と相談してこれからの利用方法も再検討していきたい。

(4) 閉会

司会者 横井沙織（研修委員長）より、美作大学附属図書館見学に先立ち閉会の挨拶があった。

(5) 美作大学附属図書館見学

自由見学。1階から4階まで見学させていただく。iPad等の館内貸出手続きは1階カウンターで学生証を呈示。iPad専用プリンターも設置されている。「しおりコンクール」で寄せられたしおりを作成・配付されており、ブックハンティングで選ばれた図書や国家試験対策用の図書がコーナーとして別置されていた。

以上